◆　第七話　窓（まど）　岩（いわ）　（昭和２９年１１月２０日掲載）

都生活の窮屈さ、わずらわしさに耐え得ないので、都から飛び出したい気持ちを源八郎為朝は持っていた丁度その時、父為義に勘当された。

上皇の御所で、藤原信西に対して無礼の振舞いがあったとの事である。兄義朝からも、八幡太郎義家以来の源氏の地盤である、関東や奥州に逃れるように、再三勧められたのであるが、九州にやって来たのは、官位や家柄を捨てて、裸一貫で仕事がしたかったからだ。

香椎では、宗像権太夫と云う悪人を退治して、自ら鎮西名乗ったのはのは、九州総追捕史を以って任じたのである。実力だけの世界、武勇を持って名をとどろかせたいのが為朝という、自然児の念願であった。

宮崎を過ぎ、阿蘇から彦山へと気ままな一人旅だった。父為義がひそかに付けてくれた、家来三人は途中で追っ払ってしまった。家来に忠義顔がわずらわしく、源氏の御曹氏と云う肩書をかなぐり捨てたかったのである。時には猿のように山野を駆けずり廻り、時には鷲のように大空を飛翔する生活がしたかったのだ。彦山から山国谷へ、この風光明媚な渓谷を愛しながら、守実の里から宇曽へとやって来て、街道の横にある巨石に腰掛けて休んでいた。不図前方を見ると巨巌が山の峯にどっかと乗っている。村人に聞くと窓岩と云う。為朝の胸に武勇を持って自然を征服し度い欲望が、むらむらと起こったのである。

「あの窓を射抜こう。」と云う為朝の言葉に通りがかった一人の村人はびっくりした。そんな事は、鬼神魔性でも出来ないと思ったのである。窓岩と云うが、ここから風穴は見えないのであるから、それは丁度襖越しに的を射るようなものだ。それをこの御武家さんが射抜くと云うのであるから、面白いと思った、その村人は村人を見物に集めるために、早速家に帰りほら貝を吹いたので、何事かと思って大勢集まって来た。

それから、為朝がにわかに作りに作った、弓矢を見て、村人は驚いた。さし渡し三寸もある、太いもうそう竹を長さ八尺ほどに切り、それを押し曲げて弦を張ったものである。屈強の村人が四五人でも持てないものである。為朝はこんな途方もない大弓を、またたく間に作り上げたのである。為朝がその弓を軽々とさしあげ、右手でぶんぶんと弦をから鳴りさせるとまるで大風が吹いて来るようで、ぶーんぶーんとうなりを生ずるのである。

それから為朝の矢を見て一層驚いたのである。それは正しく鉾（ほこ）である。長さ一間半もある矢先についている鋭い苅り又は鎧、かぶとの鎌形程もあるものである。肌を脱いだ為朝の体格に又見惚れたのである。盛り上った筋肉の隆々たる腕は右手より左手の方が三寸も長いのである。巨弓に篠矢をつけ、無雑作につがえて引きしぼり、窓岩に向かってねらいをつけたかと見ると、「村人衆、後学の為にようく見ておけ」と大音声に叫びながら、ひようと矢を放った。篠矢は隼の如く宙を飛び、窓岩の窓を通り抜けて、遥かに見えなくなったのである。

村人讃嘆の声を放ったのは云うまでもない。為朝は、耶馬渓の窓岩と云う大自然を征服した事に対して大きな悦びを感じた。かって都に居た時に、塀越しに的を射て、崇徳上皇のお褒めに与った事があったが、それ以上の自負であった。為朝は「わしの相手は自然であり、村人なのだ」とひとりつぶやいた。早速その矢を探すと春田の寺川に落ちていたそうである。それでそこを篠矢と呼ぶようになったのである。

久寿二年、為朝十八才の時の出来事である。山国谷を去って、僅か一年の間に、九州で足跡あますところ亡くなってしまった。そして強きを挫（くじ）き弱きを扶（たす）け、武勇を持って村人から尊敬されたのである。この頃が、為朝の生涯でも、幸福な時ではなかったろうか。まもなく保元平治の乱に破れ、大島に流され、悲運の一生を終ったのである。（完）

＊窓岩の景

守実から供立岩（左岸）と窓岩（右岸）を望む

窓岩（中央部）